
鬼

こめ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

鬼

【コード】

N8259B

【作者名】

こめ

【あらすじ】

母に越えてはならないと注意された山。 その山の向こうにいたものとは……。*（少し切ない物語になっていると思います）

(前書き)

お気軽に評価して下さい。

鬼

「あの山の向こうへ行っちゃダメよ」と、窓の外を指さして太郎の母が言った。

「どうして」それは何度も聞かされた戒め。太郎は、その理由が知りたい。繰り返しくり返したずねる。「ねえ、どうしてあの山の向こうに行っちゃいけないの。ねえ」

母の腕にぶら下がる。ねだる様に。

母は、なぜか悲し気な目を太郎に向ける。

「それはね、鬼がいるからよ」

初めて知らされた戒めの答え。太郎は、興味を示す。「鬼って、なあに。どんなことをするの」

「とても、ヒドイことよ」母は太郎の頭をなでながら言う。

「それじゃあ、分かんないや」太郎は母の顔を見あげる。「もっと、詳しく教えてよ」

「それは、できないわ。とにかくいろいろとヒドイことをするのよ」母は太郎をあやす調子。「あまり詳しく説明したら、太郎ちゃん決つとおフトンにおねしょしちゃうわ」

「ふうん」太郎はどうもスッキリしない。「じゃあ、どうして鬼さんはそんなヒドイことをするの」

「鬼、だからよ」かんぱつ置かず母は答えた。

太郎は驚く。「えっ。それじゃあ、僕がなにも悪いこととしてなくても、鬼さんは残酷なの」

「そうよ」母はいとわし気に頭をふる。「ねえ、太郎ちゃんは良い子よね。お母さんの言いつけ、守れるわよね」

「うん」太郎は素直に返事をした。「他にも、何かいる」

「他にも、って」母は太郎の問いが解せぬといったふう。

「ひとつ目のドラゴンとか、お花の妖精とか」太郎は思いつくままに架空の生き物を並べ立てる。

あまりにもキリがなさそう。母は、途中でそれを止めさせる。

「分からないわ。だけど」かがんで、太郎の目線に合わせた。「鬼は、いるのよ」

「鬼は、いる」太郎はオウム返し。

母もそれを強調する様に。「鬼は、いる」

太郎のお気に入りの場所、それは村の広場。友達といろんなことをして遊ぶ。外が明るいうちから日が暮れるまで、ほとんど毎日。

母の手伝いは時々でいい。太郎はまだ子供。決められた時間までに帰宅すれば、文句も言われない。

今日も、太郎はそこへ出かける。見慣れた友達の顔。

さっそく、あの話をする。「ねえ、鬼って知ってる」

「あつ、知ってる」という声と、「なに、それ」という声。

皆が広場の中央に集まる。それぞれが自分の知ってる限りのことを教え合う。だまって聞いてる子も。

しかし、驚くような情報は、何も無い。太郎の知識にほんの付けたし程度。どこの母親も、あまり詳しい説明はしていない。

好ましくないと判断したのか、ただ単に面倒臭がつてか……。

とにかく太郎たちは、話を打ちきった。これ以上つづかないのだから、仕方がない。

さて、今日はなにをして遊ぶ。話題はそちらにむかう。

これは、単純に多数決でいい。缶蹴り。夢中になって遊ぶ。幸せの時。心地よい疲労感。

夜がくるまで、つづけられる。

そして翌日、翌々日と、日を追うごとに鬼の話は少なくなっていく。完全になくなってしまうのも、時間の問題。

新しい知識が得られないのだから、いつも話す内容が同じ。飽きてしまう。子供なら、なおさら。

ただ、太郎はひとりきりになることがある。理由はいろいろ。友

達がつかまらなかつたり、母にかまってもらえなかつたり。暇を持てあましてしまう。

そんな時、誰にも教えていない秘密の場所へいく。村はずれの高い山を少し入ったところ。伐採され、平たく整地されている。見晴らしは最高。丸い切り株が指定席だ。腰かける。

やることは、空想や思索。ほとんどが鬼について。母にその存在を教えてもらってからというもの。

つまり、友達と話す機会は減っても、太郎の鬼に対する興味は薄れていない。むしろ、高まるばかり。

「鬼かあ」太郎は呟く。

抱えた膝のうえにアゴをのせて、遠くを見つめる。視線の先は、母に越えてはならないと注意された山。

「この世に、いるのかなあ」

太郎は純粹。しかし、すべてを鵜呑みにはできない。

今までちよつとしたイタズラなどが原因で母に怒鳴られたり、お尻を叩かれたりしたことはある。だが、何の罪もなければ、そんな仕打ちは受けない。周りの誰からも。

怒って手を上げたりするのは、自分を正しく導くため。要するに愛情。そう、思っている。

しかし、鬼は罪もないものにヒドイことをするという。

「信じきれないなあ。そんなに怖い生き物って。だけど、お母さんがウソをつくとは思えないし……。うううん」

太郎は堂々巡りをくり返す。いつまでたっても、答えは出ない。

そんなある日。いつもの広場で友達を前に、太郎は我慢しきれなくなる。

「ねえ、みんなで行ってみようよ」と、あの山を指さす。

「いやだ」全員が反対。中には、顔が青ざめている者も。「もし鬼に捕まったら、どんな目に遭うかわかんないや」

「まってよ、まだ鬼がいるって決まったわけじゃないだろ。それに、

ヒドイことをされるとは限らない。鬼がいたとしても」太郎は必死になって説得する。「優しいかもしれないよ。友達になれるかも」
皆は顔を見合わせた。誰も、首を縦にふらない。

「やっぱりダメだよ。注意されてるんだから」友達のひとりが上目使いにモジモジして言う。「大変なことになったら、どうするのさ」
べつの友達も言う。「そうだよ。それに、鬼がいなくてもあの山を越えたのがバレたら、怒られるよ」

「そうだ、そうだ」と、皆が同意。

「ちえ、なんだよ。怒られるのが、そんなにイヤなの。お尻を叩かれるぐらいだろ」太郎は両手を広げて訴える。「だいいち、あの山を越えるのが、そんなに悪いことなの。皆だって、鬼がいるかいないか確かめたいだろ」

皆だまって、うつ向く。

太郎はつづける。「ちよっとした冒険だよ。行こうよ」
側にいた友達の腕をつかんで、引つ張った。

その友達は太郎の手を振りほどく。「やっぱ、嫌だよ」

「どうしてさ」太郎はその理由を問う。

答えは、返ってこない。誰もその場を、動かない。

太郎は、しびれを切らす。「じゃあ、もういいよ。僕ひとりで行くから」

友達に背を向け、駆け出した。

皆、おどろく。

「あつ、待って。行っちゃ、ダメだよ」と、悲鳴に近い叫び声。

「もどってこいよ」「どうなっても、しらないぞ」次々に大声があがる。

しかし、太郎は止まらない。気持ちは、押さえ切れない。走り出した勢いが、それをますます大きくさせている。

太郎は広場を出て、村を横ぎり、あの山の麓にたどりつく。頂きを見上げ、ふたたび走り出す。

雑木林を、かき分ける。細い獣道づたいに斜面を上り、てっぺん

までくればあとは下り道。楽。

やがて、目的の地が目前に広がる。

「ついたぞ」立ち止まり、太郎は感動する。

開けた土地が広がり、ずっと遠くに集落のようなもの。今までに見たことのない風景だ。子供にとっては、大冒険。

「さて、これから先どうしよう」太郎は、考える。山を越えて後の計画は、立てていない。「とりあえず、その辺を歩いてみよう」

周りに気を配りながら、歩をはこぶ。一步、二歩……。

とその時、かたわらの茂みから何かが飛び出してきた。

太郎を押し倒し、おおい被さる。ボロを身にまとった老婆。白髪を分けて、額から二本の角。

「まだ、ほんの子供だから、許してやる」二本角の老婆は荒い鼻息をフウウウツと吐き出す。「そうでなければ、八つ裂きにして食っちまうところだ」

「お、お婆ちゃんは……」太郎はとつぜんのことに驚き、言葉がつけない。

老婆は言う。「わしか。わしは鬼さ。人を呪い、危害をくわえるわずかな沈黙が落ちた。

先に口をひらいたのは、太郎の方。「どうして、どうしてそんなことするの」

「それは、わしが鬼じゃから」老婆の瞳が、少し悲しげに湿った。太郎の上から降りる。

「もう、ここにはくるな。わし以上に、人間を憎んでいるものも大勢いる。子供だからといって、容赦されるとは限らん」ボロの土を手で払う。「いけ」

あの山を指さした。

太郎は唾然と老婆を見つめる。

起き上がり、ややためらってから走り出す。血の気が引いた顔は、青白い。

鬼

麓のところで立ち止まり、振り向いた。「お婆さんは、人間にし

が見えないや。角がはえてるだけで」

「ふん」と、老婆は口の端を歪める。「もとから鬼だったわけじゃねえさ」

「それは、どういうこと」震え声できく。

「大人になれば、分かるはず。お前さんの村の人たちが、いかに年寄りをゴミ扱いするかが。そしてわしが、人を憎む鬼になった理由が」ヒツヒツヒツヒツと、老婆は狂ったように甲高く笑った。ひと滴の涙が頬を伝う。

「人はみな、鬼なのさ。本当は」どすつと、地面を踏みならして老婆は叫ぶ。「さあ、その姥捨^{おぼ}て山を越えて、自分の村に帰れ」

ガ二股にゆつくりとにじり寄った。

太郎は、今度こそ脇目もふらずに逃げる。

鬼はいるのよ。

鬼はいるのよ。

鬼はいるのよ。

母の言葉が頭の中にこだました。

悲しげな母の目。 あの鬼の老婆に、少し似てると思う。

- 了 -

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8259b/>

鬼

2009年6月25日16時31分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。